

KSKP



とくていひえいりかつどうほうじん

特定非営利活動法人 リアライズ

にゅーす

リアルライフNEWS

ぼりゅーむ

vol.17

1984年8月20日第三種郵便承認

毎月(1・2・3・4・5・6・7・8の日)発行

つゆ きせつ
梅雨の季節になりましたね!

アメニモマケズ、リアライズは突き進んでゆきます★★★



がくせい そつぎょうしき ようす
(学生ヘルパー卒業式の様子)

第5回！ とつげき！ となりのばんごはん！

※※※けっしてパクリではありません※※※

前号お休みいただきましたが、順調に続いています♪

今回は、ひろえちんの登場です☆突如、リアライズに降臨したパワフルガールを紹介させていただきます！

第5回ゲスト！

ぷろふいーる

森 寛絵 (ひろえちん)

年齢：29歳

障害名：脳性麻痺

趣味：パソコン・映画鑑賞

好きな物：スヌーピー・ケミストリー

嫌いな物：ウスターソース

家族：父・母との3人暮らし

ひろえちんは現在両親と暮らしていますが、自立するぞ！ということで、去年9月にリアライズと出会い、怒涛の勢いで自立に向かっていて、とってもパワフルで、皆を元気にさせるムードメーカーです♪



ひろえちんは、現在平日の日中は生活介護に行っている時以外は全てヘルパーを入れた生活を送っています。生活介護から送迎車で帰ってきてから、ヘルパーと近くのコンビニに行くことが多く、この日もコンビニに行っていたようです♪コンビニで買い物後、家



に戻り、いつもしてるみたいにパソコンへ直行！！

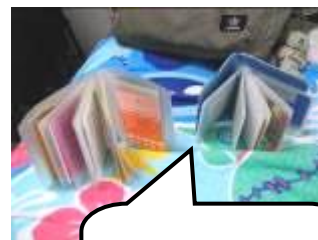
ひろえちん：いつもパソコンしてるねん。

マキ：パソコンってネット？

ひろえちん：うん。ビンゴするねん。

マキ：ビンゴですか？

ゆっこ：ひろえちんはポイントカード大好きやから、Tカード (TUTAYAのカード) のポイントアップビンゴ毎日してるんやんな (笑)



ひろえちんのポイントカード☆

ひろえちん：うん！めっちゃポイントカード持ってるで！

と言って、介助者にキーボードをセッティングしてもらい、慣れた感じで電源を入れました。起動して、デ

今回は、リアライズのゆっこ (宮元) とパイオニアでお馴染み、マキちゃん (泉本さん) とでひろえちん宅にお邪魔しました♪ひろえちんは貝塚市に両親と住んでいますが、今日は両親が旅行に行っているということで、初めて両親がいない夜を過ごす特別な日にお邪魔させていただきました☆



スクトップが表示されると・・・

マキ：あ！！好きなんですか？

ひろえちん：うん大好き！
ASAYANから好きやねん。ファンクラブにも入ってるねん♪
どうちん君がすきや



ねん！マキちゃんは誰が好き？

マキ：EXILEのたかひろが好きです♪好きなタイプってどんな人ですか？

ひろえちん：リアライズで言うといかなあ（笑）

マキ：え～！！（爆笑）あたしは啓司君（山本）かな！



ゆっこ：え～！！（笑）
というような、女子会のような会話を繰り広げた後、リビングに移

り今の生活について話を聞きました☆

マキ：この家は12階で見晴らしいですね。

ひろえちん：20年くらい住んで、3/28に入居してん。

ゆっこ：よく日にち覚えてるね。

ひろえちん：時々、覚え過ぎて都合が悪いねんけど、誕生日とか日にちはめっちゃ覚えてるんねん。リアライズの事務所に初めて行ったのは、去年の9/7で…

ゆっこ：すごいよね。リアライズの介助を使ったのは去年やけど、それまではどうしてたの？

ひろえちん：それまでは、他の事業所でガイドとお風呂の介助を使って、日中は生活介護に行ってた。

でもお母さんが足の手術することになって、それからはずっとショートステイをつないで暮らしてた。も

う嫌やけど仕方なくそうしてた。今は1/1から重度訪問になって家で暮らせるからめっちゃ良かった！

マキ：今は泊り介助も使ってるんですか？どんなこと毎日してるんですか？

ひろえちん：明日の準備とか、パソコンしたり、介助ノート（入れ替わる介助者への引き継ぎ用ノート）書いてるよ。今まで全部お母さんにして貰ってたけど、今はヘルパーに指示してやってるから、お母さんも楽になったと思うよ。今までやった事ないことばかりで、鍵も最近持ってた！（皆にとって）当たり前のことをしたことなかった。お母さんが先に寝ることもなかったけど…今は自由にできるし楽しい♪「ヘルパーがいる生活って大変ちゃう？」ってよく聞かれるけど、めっちゃ楽しい。1/1（重度訪問介護になった日）から初めてづくしの毎日。好きにやれるってイイ！好きな時に好きなとこにいけるし、これ重要やけど、好きな時に帰れるね

ん！！今は一日25時間欲しい☆
マキ：25時間を使ってどんなことしたいですか？
ひろえちん：時間をもっと有効に使いたい！今の夢はオールでカラオケ行きたい！
マキ：どんな歌、歌うんですか？
ひろえちん：ケミストリー、コブクロ、KinKi Kids、
あやか、スマップ、スキマスイッチとかかなあ。
マキ：歌好きなんですね♪ひろえさんは、なんか当事者のサークルもしているんですね。
ひろえちん：もう11年目になるDoDo講座っていうサークルをやってるねん。皆幼馴染で、今は（ひろえち



んが) 副会長してる。バリアフリーチェックとか、「きいて～ (自分史を語る)」とか地域のイベントとかに参画してるねん。4月からは「ゆうゆう」って名前にするねん。私が考えてん。あなたのYouと遊ぶっていう意味やねん。

マキ: すごくいい名前ですね! 活動もすごく興味あるのでまた色々聞きたいです♪

ゆっこ: マキちゃんも自立目指してるけど、自立に向けて二人はどんなことしてるの?

マキ: 私は料理好きで、調理 I L P でオムライスとかカルボナーラ作った。最初、ミ

ートソースをラップなしでチンしたら爆発しました (笑)

ひろえちん: 私はまだ作って



ないけど、最初に作るのは鍋にするねん。今月中にきのこ鍋つくる! クックパッドで調べてん♪

ゆっこ: 一人暮らしは楽しみ?

ひろえちん: 今日は初めて一人やから嬉しい!!

(本日両親は旅行中で初めての留守番) 夕食はバランス考えてサラダも買ったよ! 最近家計簿もつけてるしちゃんと合ってるから嬉しい! 一人暮らししたら、皆でたこ焼きパーティするねん。



ゆっこ: 今は両親と一緒に住んでるけど、不安じゃない?

ひろえちん: 家は好き!

でも、いろんなところに行っているいろんなこと感じたい。今の生活は親もおって楽やけど... 一人暮らしは不安も大きいけど期待も大きい。

マキ: 一人暮らしに向けて楽しんでるんですね☆

取材後、今からお風呂の掃除して、お風呂沸かしてごはん食べるわ! めっちゃ楽しみ!! と初一人の夜を満喫しようとすごく嬉しそうでした。後日、一人の夜の感想を聞きましたが、プチ一人暮らしめっちゃ楽しかった! と一人暮らししたいなあという気持ちが高まったようでした♪

ひろえちん曰く、これをしたなら元気になったプレスレット!!



ひろえちんの自慢の一品♪さおり織のティッシュカバー



ひろえちんが大好きなスヌーピー☆お姉ちゃんからの誕生日プレゼント♡



☆パイオニア letter☆

ひさいち けんじょう し
被災地の現状を知るべく、福島を訪問

もく きん
2/23(木)~24(金)

こんにちは！地域生活センター・パイオニアの
トクこと岡田です☆今年で未曾有の関東東北大震災
から早一年、震災の被害は未だ続く中、パイオニアと
しても泉大津で募金活動などを続けてきましたが、
この度、ひよんなきっかけから被災地である福島県
郡山市の自立生活センター あいえるの会と J D F
被災地障がい者支援センターふくしま、そして福島市
の I L センター福島にお邪魔する機会をいただくこ
とができました。二日間という本当に短い間では
が、他では聞くことのできない現地の生の声を聞くこ
とのできた貴重な二日間でした！！

目に見えない被害の深刻さと着手の難しさ

今回、郡山市・福島市を
訪れてまず一番強く
感じたのは、建物の倒壊
や物理的な損害が意外
に少ないということ



↑ J R 郡山駅の風景

した。テレビなどではよ
く、福島といえば建物や
ビルが激しく倒壊した
沿岸部ばかりが注目さ

れますが、今回訪れた内陸部では事情は異なり、きれ
いに整備された建物や道が目立ちました。

しかし一方、福島で最も深刻かつ解決しづらい問題
として放射線の問題があります。一日目に訪れたあ
いえるの会 生活介護たいむ I L の障害当事者の方や

I L センター福島の方もおっしゃっていましたが、
放射線の問題は「目に見えない恐怖」や「手のつけよ
うのなさ」があるとのことでした。「今すぐに影響の
出ることではないので、気にしなければ気にならない
ともいえる」といったお話もありましたが、事態は
深刻で、いつ影響が出るかわからない上に対処もで
きず、また放射線
のために、時と共
に朽ちていくの
を承知の上で
長年来的我が家



← 郡山市の仮設住宅

を離れざるを得なかったり、不十分な環境の仮設



↑ 原発被害の賠償につ
いての書類。あまりにも多く
分りにくいことも

住宅に移らざるを得な
い現実があり、お力にな
るために訪れつつも、
現状のどうしようもな
さに何ともいえない気持
ちになることもありまし
た。

避難障害当事者の受け入れについてのお話も聞きま
した。避難者の中には神戸・大阪・東京などの大都市
に移っている人もいるそうですが、避難先での介助者
の確保の問題や、住宅の設備の問題、家賃等財源的な

部分での保障の問題な
ど、一筋縄ではいかない
部分が多くあり、とても



← たいむ I L の皆
さんとお話中。

なや 悩ましく かん 感じました。

(9)

伝えていくべき福島のパワー

しかし、これほどまでに深刻な状況がある中で、突然お邪魔した僕たちを温かく受け入れてくださった福島の方々には、確かな力強いパワーを感じました!!(^_^)

C P（脳性マヒ）マニアだと言って僕に心温かくからんで下さった(笑) あいえるの会の宮下さんをはじめ、支援の現状について詳しく教えて下さった被災地障がい者支援センターふくしまの白石さん、現状について長時間お話をきかせて下さったILセンター福島福島の皆さんなど、皆さんとても優しく温かくて、人を大切に思う気持ちがすごく伝わってきた二日間でした。

ILセンター福島の代表の角野さんが、「内陸部に今必要なのは物資や募金以上に、運動を広めていく障害者だ。運動の広まっていない地域には避難していくこともできない」とおっしゃっていましたが、福島の皆さんからいただいたパワーと元気を大切に、今回知り合えたつながりをこれからも大事にしながら、これまでの募金活動をはじめさまざまな活動に積極的に参加していき、着手が難しいながらも、運動を伝えることであったり、今回お聞きしたお話をもっといろんな人やいろんな所に広げていくことであったりと、自分のできることを精一杯やってくればと感じています。福島の皆さん、二日間どうも本当にありがとうございました!!(^_^)

☆ 福島 特選写真集 ☆

→ 二日目の朝、福島駅前でのワンショット☆



↑ あいえるの会 代表の白石さんによる被災障害者支援のお話を聞いています(^_^)



↑ オフィスILの宮下さん、岡部さんと歓談中(*^_^*)

ねんど だい かい だい かい けんしゅうかい 2011年度 第3回&第4回 ヘルパー研修会

ばしょ
場所：リアライズ・サロンスペース

だい かいめ
第3回目 テーマ：『介助とどう関わっていくか?』

こうし
講師：リアライズ常勤ヘルパー

かわぐち かわばた ほしの もりた よしい
(川口、川端、星野、森田、吉井)

にちじ
日時：2011年12月18日 (日) 14時30分～17時30分まで

さんかしや
参加者：19名 (内スタッフ7名) ※講師の常勤5名含む



だい かい けんしゅうかい 第3回 ヘルパー研修会

リアライズがヘルパー派遣事業を開始して、5年目を迎えます。改めて「介助とどう関わっていくのか」をテーマにヘルパー研修会を行いました。

リアライズの介助者について振り返ってみたところ、「当事者との関わりを仕事と割り切っていて、介助時間以外の場面では当事者と積極的に関わろうとしていないのではないか。」との意見が研修担当者の会議で出されました。そこで、今回は常勤ヘルパーを講師として、普段介助者が実際に介助をしている際に何をどのように感じているのか、それぞれが理想とする介助とはどのような介助なのかをあえて当事者を交えないで、介助者同士が本音で話合える形で研修会を行いました。

じぜん 1. 事前アンケート

研修会に向けて、介助者がどういう思いで介助をしているのか知るために登録ヘルパーにアンケートを実施しました。それぞれの介助者がどういう事を感じたり考えたりしているのかを訊きたいという常勤ヘルパーの思いから、アンケート内容は、『①：介助の楽しい時、しんどい時』、『②：普段の介助(何を意識しながら当事者と関わっているのか)』、『③：理想の介助者』の3つにしました。アンケート結果の中で今回の研修の大きなテーマになりそうな回答には、①のしんどいときの回答で、「自分を出さない介助はしんどい」、「自分の意見が言えない」、「自分の感情を抑える」といったことが挙げられ、当事者との関係性がうまく築けていないのではないかとと思われるものがありました。また、『③：理想の介助者』では、「介助の場面でお互いが考えていこと、思ったことを話し、聴ける介助者」、「介助中かどうかを問わず、当事者の多様な価値観や想いを受け止めることが出来る介助者」など、しんどさと理想の介助者にギャップがあり、どうすれば自分たちが思うような理想の介助者に近づけるのかを研修会で考えました。

2. 当日の様子

当日の進行は常勤ヘルパーが講師という形で、1. の事前アンケートを元に話しが進みました。

まず、「①介助の楽しい時、しんどい時」について進めようとしたのですが、「②普段の介助」、に関する意見も出てきたため、まとめてディスカッションしました。①の楽しい時については、「当事者から信頼されていると感じる時」、「様々な人と出会うことで介助者の世界が広がっていると思う時」等が挙がっていました。そして、ある常勤ヘルパーからしんどかった時の例として、「介助中、当事者が話している話題についてただ自分も話したいという思いから会話に入り込んでいると、当事者の指示に反応できず、注意を受けたことがあった。その後当事者の指示にだけ反応できるよう意識してロボットのように介助をしたが、当事者・介助者がお互い何を考えているのかわからない状況になってしまい、しんどくなったことがある。」という話が出ました。これでは日々変わりゆく当事者の生活、またそれぞれの当事者によっても対応できません。

当事者からの指示だけでは一方通行になり、この当事者はこういう人だと勝手に介助者が思い込んでしまう可能性が少なからずあります。日頃からお互いにコミュニケーションをとっていれば、当事者の思いや状況がある程度想像することができ、介助者が想像する当事者像と実際の当事者が考えたり思ったりしていることのズレが小さくなるので、介助者は感情を抑えなくても気持ちをコントロールしやすくなるのではないかと、という考えが研修担当者会議の中で出たので、この話をしました。

次に、登録ヘルパーが思う理想と現実にどのような矛盾があるのかを確認するため、「③理想の介助者」とはどんなものかを訊きました。1. の事前アンケートに加えて、「常に変化する、求められる介助者像に沿って、それぞれの当事者にフィットする介助者。」や、常勤ヘルパーからは「あうんの呼吸ができる介助者」、「当事者が楽しんでいる時は楽しい時間を共有し、悩んでいる時は共に考えたりする介助者」というものを挙がりました。そして、こうした理想に近づくためには何が必要なのかを登録ヘルパーにたずねると、「お互いの長所・短所を知っていきながら信頼関係をつくるのが大切だと思う。」、「当事者とヘルパーの価値観の違いをお互いに理解して、日常生活上のストレスを減らすことができれば、お互い楽に介助ができるのではないか。」という意見が挙げられました。

常勤ヘルパーからまとめとして、「わからないことがあれば聞き、自分の感情や思いを抑えて介助することが当事者にとって本当にいいのかを考えてほしい。」、「しんどかった時の例のように失敗することもあるが、失敗を恐れて指示された事だけをする無難な介助よりも、当事者としっかり話し合っ信頼関係を築いていく介助をする方が良いのではないか。」ということを伝えました。

3. 感想

今回は、常勤ヘルパーからの質問に登録ヘルパーと共に普段思っている事を話すという形で研修会を進めたので、登録ヘルパーが介助について考えている事を知る良い機会になりました。しかし、テーマに対する答えとして明確なものがなく、常勤ヘルパーとしても難しいと感じる研修会となりました。

今回の研修会を行うにあたって、常勤ヘルパーや当事者、コーディネーターを含め、打ち合わせの段階で何度も話し合ったにもかかわらず、自分達の想いや介助を言葉にしたり、伝えたりすることがうまくできませんでした。また、参加者の問いに対して臨機応変に回答ができず、進行することで精一杯になりました。そんな中、介助者から出た様々な想いに共感しすぎてしまい、当事者の視点が抜けてしまいました。普段から当事者の視点が意識できていれば、介助者に感情移入しすぎず、当事者の立場に立って話すことができたのかも知れません。

研修会では課題も残りましたが、参加した登録ヘルパーからは、「介助者同士で介助のことを話し合えてよかった。」との感想が多くありました。介助に対する考えや悩みを介助者同士で話し合う機会がなかったこともあり、自分の介助についても改めて考える機会になったようです。

今回の研修は、これといった腑に落ちる答えが見つけれず、事前に話し合っていた内容をうまく伝えられない、ほろ苦い研修会になりました。

(文責: 川口 和洋、吉井ひかり)

第4回 ヘルパー研修会

前回の研修会では、ヘルパー自身が介助で感じていることを話す機会を設け、それぞれが抱える課題や悩みを共有できたように思えます。しかし、当事者から見た視点を欠いた話で完結してしまった部分もあり、反省点も多く残りました。そこで第4回研修会では、当事者を講師に迎え、自分史、自立生活のきっかけ、自立生活の楽しさや大変さ、ヘルパーとの関係性等について、当事者自身はどのように思っているのかをトーク形式でざくばらんに話してもらうことになりました。

日時: 2012年2月12日(日)

場所: リアライズ・サロンスペース

第4回目 テーマ: 『当事者講師とトークショー!』

講師: 太田 康裕 氏 (自立生活センター・あるる代表)

川本 将勝 氏 (自立生活者)

辻田 奈々子 氏 (自立生活者)

参加者: 23名 (内スタッフ5名)



写真紹介: 左から、川本氏、太田氏、辻田氏

～ 講師たちが介助者との関わりで思うこと ～

辻田氏からは介助を使い始めた当初は、自分からの一方通行の指示でヘルパーと接していたが、そうになるとヘルパーが思っていることが全く分からず、自分から聞かない限りは聞き出せない状態になり、それはそれですらなく、お互いの個性が出し合える関係になりたいと思うという話がありました。

した。

太田氏からは介助に入り始める時に、自分がどういう人間なのか、どんなところにこだわっているのかヘルパーに伝えるようにしている。ただ、自分のことだけでなく、ヘルパーの意見も聞くようにしている。お互いの意見を伝えながら関係を築けたらと思う。しかし、当事者とヘルパーの間だけでは難しくなる時もあるので、その時は事業所も一緒になって考えていく形がいいと思うとの話がありました。



写真：ヘルパー研修会の様子

川本氏からは一人暮らしする前からヘルパーを使っていたが、実家ではヘルパーがいなくても最終的には母親がいたのでそれほどヘルパーとどう関わればいいのかなんてことは考えなかった。その当時は「ヘルパーは、利用者の指示に基づき、自分の手足の代わりとなり介助をするに徹する存在であり、利用者に口答えするのは考えられない」と思っていた自分にとっては、ヘルパーがどう思っているかに耳を傾けることはなかった。しかし、一人暮らしを始めると、今までのようにヘルパーに自分が思うことだけを指示していくことだけでは、一人暮らしの生活はうまくいかなかった。

一人暮らしを始めるとヘルパー以外には自分を介助する人間はいないし、介助者と互いに話し合える関係を作っていないと生活が成り立たない状況が出てきて、よりヘルパーとの関係が重要になってきた。リアライズに来るようになってから色々考えるようになり、自分が思うことを指示するだけでなく、ヘルパーが介助の中で感じることも、疑問に思うことを聞いて、互いにコミュニケーションをすることで関係性ができていくと思うという話がありました。

— ヘルパーからの感想 —

- ・普段は当事者とヘルパーに対する思いや、自立生活以前の話、自立のきっかけ等話す機会があまりなかったので、聞くことができてよかった。
- ・介助者と当事者が見ている方向が一緒になったり、足並みが揃えばお互い悩まずに関係を築けたり、当事者の生活が良くなっていくのかなと思います。
- ・最初はヘルパーに指示をすることに不安とかいろんな思いがあることが分かり、ヘルパーも指示を出しやすい環境を作るため、当事者との向き合いが大事だと思いました。

— 今回の研修を受けて… —

障害者の権利として制度で介助が保障されていれば、当事者はヘルパーに気を遣うことなく介助を頼むことが出来るとヘルパーは思っているようですが、当事者から見ると実際の介助現場では、権利で介助を保障されて

いるというだけでは気を遣わずヘルパーに指示を出せるということではないようです。そこには当事者とヘルパーからみた視点にズレがあるようです。このズレを解消する為には、当事者とヘルパーが互いに知り合い、同じ視点に立つ必要があると思います。今回の研修では、当事者がヘルパーに気を遣うことや介助者との関わりにくふしたり、悩んだりしていることが分かりました。しかし、当事者側だけが考えても成り立たず、介助者からの歩み寄りがないと互いの関係性を持つことはできません。ヘルパーは、当事者がどんな生活がしたいのか、当事者の趣味嗜好を知ったり、当事者がどのようなヘルパーを望んでいるのかなど、その人を知ることが関係性をつくる上で大切なことだと思っています。

(文責：山本 啓司)

Part3 経験から学べ！！～私の自立生活運動～

「大阪における自立生活運動の展開～私の経験から～」

前回に引き続き、元ピア大阪の野谷 靖 さん
による、「私の自立生活運動」最終話です！

第三部：制度の獲得とこれからの自立運動

80年代後半の流れ

85年12月に、「大阪障害者情報センター」が開所した。これは我々の大阪の運動が、80年代前半の諸取り組みを通じて得た経験や教訓を広く社会にアピールしていこうという趣旨のもと、その事業を「社会的な事業」として確立していこうとした点に特徴がある。情報センターは、大阪青い芝の事務所を不便だった守口から住吉区我孫子に移転し、そこに常駐する形で中央機関を作ったのだった。事業の二本柱は、「障害者の自立を考える連続セミナー」の開催と「障害者の自立を考える

る総合情報誌・コミュニティーズ」の編集・発行であった。自立セミナーは古田朋也・尾上浩二が担当、コミュニティーズは野谷・桧垣 寛が担当した。いずれも3ヶ月に一度のペースで開催・発行していた。自立セミナーは、障害者運動の歴史、生活問題、労働問題、今後の自立の展望といった流れで構成し、コミュニティーズは生きる場作業所巡り(そこから「コミュニティーズ交流会」として、拠点同士の相互交流を行ってきた)、更には、施設問題、ケア付き住宅・グループホーム、自立生活プログラムなど、最新の情報や最先端の取り組みを誌上で取り上げていった。

1986年4月の障害基礎年金の新設により、障害者の所得保障は一定だが進んだ。しかし、その結果として、施設に入所している障害者に費用

徴収をすることが始められようとした。好き好んで施設に入所している訳でも無いのに、施設の処遇は劣悪なのに、その上お金まで取られるということで、全国的に反対の声が巻き上がり、厚生省を取り囲んでの全国抗議行動となった。中心となったのは、「所得保障確立連絡会」を母体とした「自立生活確立連絡会（自立連）」であった。大阪からも久々の全国闘争ということで多数が参加した。厚生省は費用徴収を強行したが、各自自治体の徴収は7月からにずれ込ませた。当然の如く、大阪でも対市抗議行動を取り組み、今後の施設改革に向けて協議すること、地域で暮らせるケア付き住宅・グループホームについて障害者団体と一緒に研究していくことを確約させた。

87年2月からは、大阪市が「全身性障害者介護人派遣事業」を開始した。当初、月に12時間、時給540円というおそまつなものであったが、交渉を通じて毎年時間数アップ、介護料増額がなされ、2002年度までには月153時間、時給1410円までいった。親の所得がおおと受けることが出来ず、生計中心者非課税世帯に限られていた。これらは運動の結果、撤廃され、本人所得になった。最初は青い芝の自立生活者しか活用していなかったが、徐々にひろがり、誰もが受けていると言ってよい状態にまでなった。この全身性障害者介護人派遣事業は、月に約20万円、介助のためのお金が入るということで、広範な障害者が自立を考えるときに、おおきな支えとなったと言える。

また、87年から、大阪青い芝の会と大阪市の間で「ケア付き住宅研究会」がスタートし、定藤文弘先生の講演や北野誠一先生の講演も交えて行なっ

ていき、障害福祉課を交えての「新宿自立生活体験室」や横浜の「ふれあい生活の家」、札幌の「北海道ケア付き住宅」の視察にも取り組み、中部でのグループホームの構想を提示し、市にグループホーム制度を創設するよう求めていった。そして、89年5月に、大阪市身体障害者グループホーム試行事業を受けて、中部の「とんとんハウス」が4名の入居者とグループホーム圏に住む1名で開所した。

80年代後半の運動は、建設した「地域拠点」において、一体何を具体的にこなしていくのかということが問われたと思う。中部を例に挙げるなら、野々村さんのパイオニア自立とその挫折という痛苦の体験の教訓から、日々のセンターでの日中活動の充実が求められ、自立トレーニングや様々な生活体験を積み、実際の日常生活を障害当事者主体に決めていけるように取り組みを進めてきた。ウィークリーマンションをも活用した宿泊訓練にも取り組んだ。今の言葉で言えば、自立プログラム（ILP）と当事者同士の徹底した話し合い（ピアカウンセリングに近い取り組み）を中心に、自立体験を積んできた。故に、この時期の運動は「生活の中味づくりと自立に向けたグループホームの建設」ということに集約できると考える。

自立生活センターの展開については、大阪では90年代に入ることになる（東京ではヒューマンケア協会が84年から開始）。

運動を担った健全者（介助者）の思想性について

70年代に介護に入っていた人々は、障害者

自身に鋭い告発・糾弾を受けて、これまで障害者と関わって来なかった自らを改め、自らの差別性を許さず、共に生きる生き方を選択しようという、かなり、頭でっかちも含めて、やや観念的に、やらなければいけないという気持ちから障害者解放運動に飛び込んできた人が多かった。

しかし、80年代以降関わり始めた人の意識は、70年代とは大きく異なる。それは一言で言うと、「障害者との共同行動がやりたい」という思いではないかと思う。理屈じゃなくって、障害者と一緒に介助も含めて、共同行動をすることが楽しいから始めたという人が多いのではないかと。私もその一人である。理屈では、障害者差別と闘うとか、差別者としての自分というものを時折意識はしたが、普段の活動の中では目の前の障害者との共同実践に集中していた。70年代の担い手と比べてじゃあ思想性が低いのかというと、決してそういう問題ではないと考える。

また、障害基礎年金を機に、各地区で「介護の事業化」が南部を先頭に取り組みまれた。今までほとんどがボランティア介助に頼ってきたことを改め、介助に対してお金が出るように変えていった。これは行政に対してどれだけの介助保障が必要かを示していくという目的もあり、介助を社会的労働として捉え返すという意義もあった。ただ、この「介護の事業化」に対しては、今までの介護者との金銭を媒介しないこれまでの関係性を覆すものだという批判が運動内外からあったのは事実である。介護者との人間関係に苦勞し、努力の結果、形作ってきた今までの介護—被介護の関係を一変させてしまう事態であったことは間違いないだろう。

しかし、実際には、事業化を通じて、これまでよりもより広い層の人々が仕事として介助に入り始め、学生だけに頼らない新しい形が可能になった。学生については、介助が金になるから入るというアルバイト感覚で来る人が増えたのは確かに事実である。しかし、入り口として、バイト感覚で始めるのもアリだと思う。関わり出してから、徐々に障害者の自立の意義や介助の重要性を知って貰っても全く遅くは無い。ただ、その学習の機会が当時充分に足りていたかと言えばそうではない面もあるだろう。様々な動機で介助に入ってくる人々に対して、いろんな形での研修を通じて、できるだけ広い視野を身に付けて貰えるようにすることが大切だと思う。



新スタッフ紹介

4月になり、新しい年度を迎えるにあたり、リアライズに新しく常勤ヘルパー2名が加わることとなりました！皆様にご紹介と、ご挨拶をさせていただこうと思いますので、現スタッフ共々よろしくお願ひします！

氏名：柴田 一平

リアライズネーム：いっぺい



皆こんにちは！！常勤ヘルパーとして働くこととなった柴田一平です！思い出せば昨年…川口君(はるお)と共にリアライズの常勤ヘルパーの仲間入りをするはずが…僕だけ大学を留年するという陰謀に巻き込まれてしまいました(自業自得)。

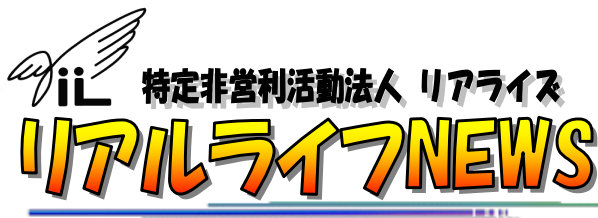
しかし！！無事に大学も卒業し、晴れてリアライズ常勤ヘルパーの仲間入りを果たしました！！リアライズとは設立当初からの関わりなので、全く目新しさの無い新人ですが、泉大津市民にもなり気持ちも新たに頑張っていきたいと思います！！よろしくお願ひします！！



お久しぶりです。稗田です。一年ぶりに無事リアライズへ戻って来ることが出来ました！この一年色々ありましたが、再び介助が出来ることに喜びを感じております。これから皆で一緒にリアライズを盛り上げていければと思いますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

氏名：稗田 一敬

リアライズネーム：ひえちゃん



目次

■ となりの晩ごはん (P. 2-4)	■ 関西の障害者運動の歴史 (P. 14-16)
■ 全関西集会報告 (P. 5-7)	■ 新スタッフ紹介 (P. 17)
■ パイオニア letter (P. 8-9)	■ 編集後記 (P. 18)
■ ヘルパー研修会 (P. 10-14)	

編集後記

2012年度がスタートしました。リアライズでは今年度も新しいスタッフが加入しました。
 パワーアップした自立生活の支援ができるようにがんばります。
 泉州地域でも、障害当事者を取り巻く環境は依然厳しく、まだまだ障害当事者の声をどんどん挙げていかなければいけません。地域の人を巻き込んで障害当事者が住みよい街づくりを目指すべく、今年度も活動していきます。宜しく願い致します！
 by. おとめ

《発行人》

関西障害者定期刊行物協会

〒536-0015 大阪市天王寺区真田山町2-2 東興ビル

《編集人》

特定非営利活動法人 リアライズ

〒595-0071 大阪府泉大津市助松町1-3-33エクセラート北助松1階 店舗4

TEL : 0725-22-7716 / FAX : 0725-22-7746

URL : <http://www.cil-realize.com/>

定価 : 100円